

令和元年6月14日現在

機関番号：32518

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02132

研究課題名(和文) 21世紀における「ローカルな環境倫理」についての包括的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Studies on "Local Environmental Ethics" in the 21st Century

研究代表者

吉永 明弘 (Yoshinaga, Akihiro)

江戸川大学・社会学部・准教授

研究者番号：30466726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、3年間に刊行した4冊の本にまとめられている。まず、雑誌『環境倫理』を創刊し、第一号では、インタビューという手法によって環境問題の現場から思想をくみ上げることを試みた。第二号では、アメリカの最新の環境倫理学の教科書であるOxford Handbook of Environmental Ethicsの内容を手分けして紹介した。さらに、勁草書房から吉永明弘『ブックガイド環境倫理』および吉永明弘・福永真弓編『未来の環境倫理学』という本を刊行した。これらの内容について、学会や研究会(書評会)を開催して、哲学者・倫理学者らと意見交換した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内で初めての本格的な環境倫理学の雑誌をつくったこと。インタビューによって市民のなかにある思想をくみ上げることを試みたこと。ブックガイドを製作して環境倫理学と環境問題に関する100冊の本を紹介したこと。「災後」と「人新世」という時代における環境倫理学の姿を『未来の環境倫理学』という名前で示し、原発事故、放射性廃棄物、気候工学といったテーマを前面に打ち出したこと。アメリカの最新の環境倫理学の教科書の内容を紹介し論評したこと。これらは学術的にも社会的にも大きな意義があるといえる。事実、雑誌も本も、刊行後に好評をもって迎えられた。

研究成果の概要(英文)：We have published four books in three years. 1) Environmental Ethics (Journal vol.1) (Interview etc.), 2) Environmental Ethics (Journal vol.2) (Review of Oxford Handbook of Environmental Ethics), 3) Environmental Ethics: bookguide (Keiso Shobo), 4) Future Environmental Ethics (Keiso Shobo).

研究分野：環境倫理学

キーワード：環境倫理学 ローカル 環境正義 人新世 気候工学 住民運動 原発事故 世代間倫理

1. 研究開始当初の背景

21世紀に入り、地球規模での気候変動対策がますます求められている。近年では「人新世」という概念の登場とともに、不確実性を伴う「気候工学」が試みられようとしている。それに加えて福島第一原発事故以降、「脱原発」が環境政治の大きな目標として浮上し、再生可能エネルギー開発が進んでいる。これらの流れの中で、ともすれば現場に立脚した地域環境の保全が軽視される傾向がある。環境倫理学者の鬼頭秀一は「ローカルな環境倫理」という形で、現場に存在する環境思想・理念と、研究者が現場に出ることの重要性を説いたが、このことは現在ますます重要な意義をもってくるだろう。他方で、「ローカル」を強調することは、環境社会学や文化人類学、保全生態学のアプローチに接近することになり、環境倫理学者の存在意義が問われることになる。哲学者・倫理学者は「ローカル」な現場においてどのような貢献ができるのかということを目を自らに問わなければならない。

「ローカル」な現場に出ることが重要である一方で、海外の議論への目配りやそれらとの連結も相変わらず必要である。そもそも日本の環境倫理学は、1990年ごろに、千葉大学が、*Environmental Ethics* 誌を中心とするアメリカの環境倫理学の翻訳紹介を行ったことを一つの始まりとする。しかしそのような海外文献紹介は、その後あまりなされず、その結果、現在の日本で流通している「環境倫理学」の中身は、1990年代の情報のままで、そこからあまり更新されていないように思われる。

以上から、代表者は、現在の日本の環境問題にそくして、現場に立って哲学者・倫理学者ができることを示すこと、環境倫理学に関する最新の海外文献の紹介を行い、それを普及させること、が必要であると考え、本研究をスタートさせた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、哲学・倫理学の立場からの環境倫理学を、「ローカル」な視点に立って提示することと、21世紀の環境問題の状況に対応しうる環境倫理学の枠組みを、海外の議論と連結させて提示することにあつた。

具体的な環境問題を倫理的に考察する際に注目すべき点として、次の五つが挙げられる(以下、五つのバランス)。

- (1) 「科学的な知識」と「ローカルな知識」のバランスについて。
- (2) 「世代内の正義(環境正義)」と「世代間の正義(世代間倫理)」のバランスについて。
- (3) 「気候変動対策」と「地域環境・生態系の保全」のバランスについて。
- (4) 「自然エネルギー開発」と「地域環境・生態系の保全」とのバランスについて。
- (5) 「地域運動(住民運動)」と「公共政策」とのバランスについて。

これらの点に留意しながら、研究期間内に、環境紛争の現場に携わった人々へのインタビューを行い、また最新の海外論文の要約・紹介を行うことを計画した。また、その成果を多くの人々の目にふれるようにするために、雑誌や著書を公刊し、その内容を学会や研究会で報告することを旨とした。

3. 研究の方法

本研究の方法はインタビューと文献紹介の2点にまとめられる。本研究では、「ローカル」な視点を重視するという立場から、インタビューという手法によって、環境紛争の現場に携わった人物のなかにある思想を引き出し、なおかつそれを哲学者が聞き取ることによって、普遍的な形で提示するという試みをした。次に、1990年代には盛んに行われていた海外文献のフォローが、近年ではあまりなされていないことから、2010年代に公刊されたアメリカの環境倫理学の教科書(*Oxford Handbook of Environmental Ethics*、以下 OHEE)の内容を手分けして日本語で要約することにより、日本の研究者が海外の現在の議論を概観できるようにした。

4. 研究成果

本研究の主な成果は、インタビュー、図書の刊行、雑誌の発行、学会・書評会での検討とまとめられる。なお、「五つのバランス」については、代表者および分担者が個別に研究し、学会発表と論文執筆を行った。

(1) 研究の過程

一年目(2016年度)は、環境紛争の現場に携わった三人の人物にインタビューを行った。一人目は、小平市の道路建設に関する住民投票に携わった神尾直志氏。二人目は、双葉町の町長を務め、震災および原発災害時に住民の避難を進めた井戸川克隆氏。三人目は、吉野川可動堰建設に関する住民投票に携わった村上稔氏。哲学研究を背景に持つ代表者および分担者が彼らの話を聞くことにより、実践のなかから生み出されつつも、明確に表現されてこなかった思想を検討することになった。

二年目(2017年度)は、前年度のインタビューを文字化して『環境倫理』第一号に掲載した。あわせて、研究代表者は『ブックガイド環境倫理』(勁草書房)を刊行し、これまでの環境倫理学および環境問題研究の必読文献100冊の内容を要約し紹介した。また、分担者および福永真

弓氏、桑田学氏との共著『未来の環境倫理学』(勁草書房)を刊行した。そこでは2010年代の環境倫理学のトピックとして、震災後の環境と暮らし、原子力発電と放射性廃棄物の行方、人新世概念と気候工学の登場、などについて論じた。

三年目(2018年度)は、応用哲学会でワークショップを行い、インタビューによって現場から思想を引き出すという方法論について報告し、フロアから意見をいただいた。また、現代アメリカの環境倫理学の代表的な教科書であるOHEEの内容について日本語で要約をし、それを『環境倫理』第二号に掲載した。研究分担者・研究協力者だけでなく、若手の近接領域の研究者にも声をかけたことにより、さまざまな観点からのコメントを加えた紹介となった。最後に研究のまとめとして、南山大学社会倫理研究所の支援により、本研究の成果の一つである『未来の環境倫理学』の書評会を開催し、主に哲学者・倫理学者から各章について批判的検討をしてもらった。この記録は今後刊行される『環境倫理』第三号に掲載される予定である。

(2) 本研究のインパクト

雑誌『環境倫理』の刊行

本研究が哲学・倫理学にもたらした大きなインパクトは、雑誌『環境倫理』の刊行である。日本には環境倫理学の学会もない(研究会はある)し、継続的に刊行される専門雑誌もごくわずかしかない。そのような中で、環境倫理学の専門雑誌を定期的に刊行していることは、(応用系の)哲学者・倫理学者から前向きな評価をいただいている。

第一号に掲載されたインタビューによって、本研究のテーマである、哲学・倫理学の立場からの環境倫理学を、「ローカル」な視点に立って提示することが、ある程度達成され、そのことは新しいアプローチを世に問うたものとして学会等で好意的に迎えられた。

第二号のOHEEの紹介は、海外の最新論文を紹介したことと、多くの若手研究者が参加したことの両面で、1990年前後の千葉大学の取り組みを引き継ぐものであり、好評であった。

また、雑誌『環境倫理』は投稿論文を受け付けており、実際にいくつかの論文を受理している。今後は環境倫理の研究者が論文を投稿する場としても機能していくことが期待できる。

『未来の環境倫理学』の刊行

本研究の期間内に、代表者・分担者が執筆に携わった図書は5冊あるが、本研究の成果報告ともいえる本は、吉永明弘・福永真弓編『未来の環境倫理学』である。これは代表者・分担者が全員執筆し、二名の協力者を得て成立した本であり、その主な目的は、21世紀の環境問題の状況に対応しうる環境倫理学の枠組みを、海外の議論と連結させて提示することにあった。災後社会のリスク、原子力発電の問題点、放射性廃棄物の処分、人新世と気候工学といった具体的なトピックを扱うとともに、環境徳倫理学とヨナスの未来倫理についての理論研究もあり、全体として他に類例のない内容になったといえる。日本の事例と欧米の環境倫理学の議論が接続されているだけでなく、環境倫理学と環境社会学、科学技術社会論や技術哲学といった他の学術領域との接続もなされている。書評会のコメントでも、細部については批判もあったが、本全体に対してはおおむね好評であった。

以上から、本研究は期間内に予想以上の成果を挙げることができたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

山本剛史、自然哲学から倫理学へ ヨナス責任倫理学の形成と今後の環境倫理学の展望、環境倫理、第1号、2017、253-292

吉永明弘、太陽光発電施設の問題を環境倫理学から読み解く、地域生活学研究、第7号、2016、77-83

熊坂元大、環境徳倫理学研究における環境徳と受傷性<Vulnerability>、総合人間学、第10巻、2016、171-180

〔学会発表〕(計18件)

吉永明弘、「人の手が入った自然」と世代間倫理 将来に引き継がれるべき土壌について、土壌肥料学会、2018

山本剛史、ハンス・ヨナスの思想における「偶然」と「時間」の問題、三田哲学会、2018

吉永明弘、山本剛史、熊坂元大、寺本剛、ローカルな環境倫理に関する新しい研究アプローチ、応用哲学会(ワークショップ)、2018

KUMASAKA Motohiro, Anthropocentrism and Anthropomorphism in Japanese Environmental /Animal Thought, International Association of Japanese Philosophy 2017 Conference Globalizing Japanese Philosophy: From East Asia to the World(国際学会),2017

寺本剛、高レベル放射性廃棄物のための世代間倫理、科学技術社会論学会、2017

吉永明弘、再生可能エネルギー開発に関する環境倫理的検討、科学技術社会論学会、2016

熊坂元大、動物倫理を踏み越える『動物のいのち』、日本倫理学会、2016

山本剛史、原発事故後の世代間倫理、日本倫理学会、2016
寺本剛、長期的リスクの引継ぎをめぐって：放射性廃棄物問題を手掛かりに、応用哲学会、
2016

〔図書〕(計5件)

吉永明弘・福永真弓 編、勁草書房、未来の環境倫理学、2018、186

吉永明弘、勁草書房、ブックガイド環境倫理、2017、228

〔その他〕(計2件)

吉永明弘、山本剛史、熊坂元大、寺本剛 編、環境倫理、第二号、2019、205

吉永明弘、山本剛史、熊坂元大、寺本剛 編、環境倫理、第一号、2017、304

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：山本 剛史

ローマ字氏名：(YAMAMOTO Takashi)

所属研究機関名：慶應大学

部局名：教職課程センター

職名：非常勤講師

研究者番号(8桁)：20645733

研究分担者氏名：寺本 剛

ローマ字氏名：(TERAMOTO Tsuyoshi)

所属研究機関名：中央大学

部局名：理工学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：00707309

研究分担者氏名：熊坂 元大

ローマ字氏名：(KUMASAKA Motohiro)

所属研究機関名：徳島大学

部局名：大学院社会産業理工学研究部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：60713518

(2)研究協力者

研究協力者氏名：桑田 学

ローマ字氏名：(KUWATA Manabu)

研究協力者氏名：増田 敬祐

ローマ字氏名：(MASUDA Keisuke)

研究協力者氏名：太田 和彦

ローマ字氏名：(OTA Kazuhiko)

研究協力者氏名：福永 真弓

ローマ字氏名：(FUKUNAGA Mayumi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。